

Behind the Evolution of Modern Design Research into the Circumstances of 1900' A Socio cultural Review of Jewish Contribution to Modernism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Waerndorfer' s villa, Purkersdorf Sanatorium, Zuckerkandle, Wiener Werkstatte 作成者: TSUKAGUCHI, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4033

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



モダンデザインの背景を探る 諸事情その9 —1900年代東欧ユダヤ人のアイデンティティ希求と重ねて—

学芸学部 インテリアデザイン学科 塚口眞佐子

要旨：今稿では世紀転換期から第一次大戦期のウィーンを観察する。英国が端緒となる前世紀の革新デザイン運動は、世紀転換期にまずウィーンで結実する。以降、ドイツ文化圏一体としてモダニズムを牽引することになる都市である。それらを強力に推進したのは、ユダヤ人エリート層の資金提供やパトロンとしての支援であった。ここに彼ら同化ユダヤ人2世代目としてのアイデンティティ希求の精神が、モチベーションとして大きく作用する。この期間は反ユダヤ主義が顕在化し激化する時期と重なる。その中で同化を目指すもかなわない圧倒的被差別感が、アヴァンギャルド文化の誕生につながる。同胞の連帯も奏功した。事例としてモダン建築のプルカースドルフ・サナトリウムなどの施主像と社会環境を見ることで、黎明期のモダン建築やデザインへの理解を深めたい。

キーワード：ウィーン反ユダヤ主義、ヴェルンドルファー、プルカースドルフ・サナトリウム、ツッカーカンドル

I はじめに

モダンデザインの発展経過を観るに、歴史様式の混乱状態が口火となり様々な思潮やデザインが登場する。セセッションなどの世紀転換期のムーブメントは、とりわけ新時代の到来を可視化させるものだった。これに続く各地のキュビズム、未来主義、構成主義、表現主義、デ・スタイルなどが1920年代後半に現代に直結するメインストリームすなわちインターナショナル・スタイルに収束し波及に至る。

今回はその端緒、すなわちセセッションを生んだ世紀転換期、および続く第一次大戦期までのウィーンを中心に観察する。ユダヤ人を注視し、アヴァンギャルドを強力に推進・支援したその群像や、モダンデザイン進展との関係を探ることとする。彼らが西欧においてモダンの展開に果たした役割は莫大である。英国での状況は紀要第3巻と第4巻ですでにみているが、ウィーンではどうか。たとえばデザイン史ではおなじみの分離派会館(1898)、その偉容にこれが前年に結成されたばかりの少数グループ分離派の専用展示場として建てられたことに、驚きと、なぜそのようなことが可能だったのか、疑問を抱かない人はいるだろうか。資金提供者はユダヤ人富豪のカール・ヴィトゲンシュタイン(1847-1913)(20世紀最大の哲学者の1人ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの父)で、画家グスタフ・クリムト(1862-1918)や建築家ヨーゼフ・ホフ



分離派会館 撮影：著者

マン(1870-1956)の施主で大パトロンでもあった。そのホフマンがコロマン・モーザー(1868-1956)と結成したウィーン工房(1903)の資金提供者もユダヤ人富豪のフリッツ・ヴェルンドルファー夫妻である。夫妻は自身の破産まで支援を続ける。アイデンティティ希求への情熱が飽くなき支援に至らせたのである。(その後ウィーン工房を引き継いだのもユダヤ人富豪でモダン建築施主のオットー・プリマヴェージュ(1868-1926)だった。)

■施主とは

施主像としては、すでに論集45号と46号で20年

代のアヴァンギャルド住宅例を論じている。総括として、高学歴・富裕層で、従来の家族像や男性主導の規範を拒否し新しい生き方を希求する女性と論じた。彼女たちにとって、社会主義・共産主義の政治活動や、芸術支援の活動拠点としての自邸は、差異のディスプレイだったのである。自己のアイデンティティを視覚化させる強い意思が彼女たちをアヴァンギャルド住宅に至らせた。つまり、社会的には高学歴の上流階級ではあっても、機会均等から閉め出された女性というマイノリティな存在、ここからの脱却を希求する手段として、前衛建築家の作品に自画像を託したのである。

男性施主像についても技術革新の気質、新興資産家、コスモポリタン体質、旧体制とは無縁層と総括した。かくしてアイデンティティ希求・革新思想が建築界での変革と相乗しモダン住宅を誕生せしめたと論じた。

紀要第3巻と第4巻では、周回遅れともいべき英国のモダン排斥傾向を観察した。恣意的セレクトではなく代表的住宅を取り上げたが、先進事例のほとんどが、施主・建築家とも中欧・東欧出身のユダヤ人であることにも注視し、英国の社会背景とともに、ユダヤ性とモダニズム運動との親和性を論じた。「変革の代理人」というユダヤ人像の総括をリヒアルト・グルンベルガーから引用し、一般には拒否感の強いモダニズム運動に対するユダヤ人の受容マインドを説明した。反ユダヤ主義の構成要素としても、彼らの持つ進取性・近代性志向への反発が指摘されている。確かに、モダンデザイン＝ユダヤとされ、嫌われた史実は随所に記録が残る。紀要第1巻でもこの点をすでにみている。

しかし、受容マインドと資金提供や施主となるまでには隔たりがある。そこには論集第45号と第46号の施主たちのように、強い動機があったことになる。英国例を始め今回の事例でも、施主たちは高学歴・富裕層・活躍する一流人士ではあっても、ユダヤ人というマイノリティで不安定な存在からの脱却を希求し、アヴァンギャルド建築家の支援に光明を見、作品に自画像を託そうとしたのである。ヴェルンドルファーもこの点に関し心情の吐露と葛藤を残している（後述）。

加えてもう1つの動機、それは世紀転換期にこそ顕著であった同化ユダヤ人（キリスト教への改宗ユダヤ人）2代目としての、自己のスタンスの模索である。この時期以降に活躍したユダヤ系文化人（その多くは20世紀の巨匠）に共通にみられる姿勢である。一般からは引き続きユダヤ人と見なされる圧倒的的被差別感、同胞からは孤立した存在、それらが新たな地平を求め行動に駆りたてた。その思いは2代目にこそ凝縮さ

れる。これらアイデンティティ希求に絡む動機は、2章と3章であらためてユダヤ人を取り巻く社会背景とともに探ることとする。

■モダンデザインとウィーンという街

モダンデザインの展開には、世紀転換期中欧が西欧全体を牽引したという厳然たる経過がある。ペブスナーは古典書ともいべき『モダンデザインの展開』で、モダン運動の端緒は英国ながら大陸での結実を次のように表現する。「大陸の建築家たちが未来のための真の様式の要素を英国の建築と工芸に発見したその瞬間に、英国自身は折衷的な新古典主義に退いた¹⁾」と述べ、マッキントッシュを「英国が来るべき近代運動に遺した形見」と語る。形見がもたらされた地はウィーンである。イングランドで拒否された作品が、1900年の第8回ウィーン分離派展で当地に熱狂を生む。曲線主体のアールヌーヴォーにほとんど影響を受けなかったグラスゴウの革新デザインの合理性と単純性が彼らを魅了し、大きなエポックを呈したのである。彼の招聘にもヴェルンドルファーが英国訪問を行っている。

ペブスナーはまた1918年までのモダン運動を総括して、ただひとりドイツとドイツに依存する中欧諸国の独自の取り組みから、現代一般に認められている様式が生まれた²⁾、と語る。確かに、モダンへの重要な一歩を直接的に踏み出したのはドイツ工作連盟（1907設立）だった。1896-1903年の英国研究から戻ったヘルマン・ムテジウス（1861-1927）のデザイン論が賛否両論を巻き、ドイツ工作連盟の設立に至る（論集47号で住宅博中心に連盟を観察）。後を追うようにオーストリア工作連盟も設立される。オーストリアとは多民族国家で、1/3を占めるドイツ人が政治・経済で圧倒的に優勢であり、同化ユダヤ人とは改宗に加えドイツ文化への同化を意味したことを確認しておきたい。

ウィーンのモダン運動には、マッキントッシュの登場、20世紀初頭のドイツ経由と並行して地勢的環境も奏功した。ここに活躍した都市計画局顧問のオットー・ヴァーグナー（1841-1918）の存在も大きい。1880年代に急激な都市化を迎えたウィーンでは、未曾有の都市問題解決のため、総合整備計画が実現されていく。ヴァーグナーは市営鉄道や駅舎、ドナウ川治水施設など公共建築に当たった。「芸術は必要にのみ従う」として近代建築を推進し、ウィーン郵便貯金局（1906-12）で歴史に名を刻む建築家である。代表作シュタインホーフ教会堂（1907）は献堂式に出席した皇太子から嫌われ、彼の画策で、コンペで得た博物館設計は潰



郵便貯金局ホール 撮影：著者

れる。皇太子夫妻はサラエボで暗殺され第一次大戦の引き金となるが、伊藤哲夫『ウィーンの近代建築の成立をめぐる』によれば、ヴァーグナーは暗殺報道を受け「皇太子の死によってオーストリアにおける近代建築の今後の発展のための最大の障壁が取り除かれたように思う」³と日記に記している。

さまざまな局面に英国が刺激を与え、モダン建築がウィーンに出現する。伊藤はそのラディカル性を例証する。「アドルフ・ロース（1870-1933）が主張した装飾の否定（『装飾と犯罪』1908）が後に正しく実践されたことは今日の建築が実証している⁴」と。

■この時期のウィーン

この1880年代から第二次大戦に至る期間は、反ユダヤ主義が中欧・東欧で猛威を振るった時代に重なる。われわれは、反ユダヤ主義というとナチス・ドイツを想起し、ドイツに顕著な現象と捉えがちであるがそうではない。反ユダヤ主義そのものは、歴史の長きに渡るヨーロッパの普遍現象である。中でも平等な市民権が付与（ウィーンでは1867年憲法）された後の80年代以降、特にユダヤ人が流入した中欧で、反ユダヤ主義が過激化した。ポグロム（集団的迫害行為）も吹き荒れた。ウィーンは指導者レベルでも民衆レベルでもヨーロッパで反ユダヤ主義を先導した都市といってよい。オーストリア人ヒトラーも16歳から24歳まで過ごした街頭で反ユダヤ主義に知悉する。ユダヤ人の間にシオニズム運動（解決策として新国家創設をめざす運動）もここに生まれる。中欧・東欧にはナチス侵攻以前にポグロムが完了していた地域も多い。

しかしながら、ナチス政権奪取（1933）やオーストリア合邦、チェコ・スロバキアやポーランド侵攻（1838-1939）までの時期、中欧・東欧ユダヤ人の受難は一樣ではない。ユダヤ人社会は階層化し分断していたの

である⁵。反ユダヤ主義への対抗姿勢すら一致を見ない。不況下にあつてまた81年ロシアでのポグロムを逃れた流入ユダヤ人難民は、市民に嫌悪感・敵視を生んだ。しかし一方でエリート層の繁栄もあった。自由主義的な側面も持つウィーンはユダヤ人に活躍の場を提供したのである。ハプスブルク帝国は多民族共存国家として超民族主義を国家理念とした。帝国内に歴史的帰属権を主張できる土地を持たずさまざまな民族の土地に散在するユダヤ人こそが、国家理念の体現者という見方もあった⁶。この理念こそがユダヤ人の生存権利を保障したのである。国家プロジェクトに参画する芸術家や学者、彼らの教育界への登用、国家に尽くす産業界の重鎮、重用される政治家も頻出し、学界や芸術界の世界的巨匠を輩出する。彼らへの複雑な感情も反ユダヤ主義の構成要素となる。しかしその被害者の筈のエリート層は反ユダヤ主義に対抗する民族主義運動とは距離を置いた。民族論の表面化・政治問題化は同化の妨げだった⁷。これは同胞同士の確執・分裂を生む。この点は2章であらためてみることにする。

モダン運動の創成期・展開期と、反ユダヤ主義が激化した時期が重なることは、別個の歴史展開である。しかしさまざまな史実や手稿から関連性が窺える。多民族共存国家オーストリア・ハンガリー二重帝国というユダヤ人にとって有難い体制は、不穏な国際状況ゆえ保証されるものではない。帝国崩壊がせまり、単一民族諸国家移行への恐怖、異民族の排除の上に成り立つ国家への移行の恐怖は深刻度を増す⁸。社会が安定性を欠きつつあるこの時期だからこそ、新たな地平を創造するモダン運動やその支援へのベクトルが昂進し危機感転化の期待を抱いたと考えられるのではないか。街には反ユダヤ主義行動が横行していたのである。

1章のはじめに続き、2章では、ウィーンにおけるユダヤ人富裕層・知識層を取り巻く社会環境つまり反ユダヤ主義をとりあげ、新たなアイデンティティ希求に至らせた背景を探りたい。若き同化ユダヤ文化人の精神性については、ペンシルヴェニア大学より出版されたアビゲイル・ギルマンの *Viennese Jewish Modernism* を演繹する。

3章ではモダン運動を支援したユダヤ人群像を取り上げる。特にアイデンティティ希求という動機が明示されているフリッツ・ヴェルンドルファーを詳しく観察したい。おもにシカゴ大学エレイナ・シャピラの論文 *Modernism and Jewish Identity in Early Twentieth-Century Vienna: Fritz Waerndorfer and His House*

for an Art Lover に依拠してまとめた。次いで、ホフマンの代表作プルカースドルフ・サナトリウム施主で、ウィーン工房のパトロンのヴィクトル・ツッカーカンドルー族とそのサナトリウムをみる。

4章ではウィーンを中心とした旧ハプスブルク帝国領エリアに現存するモダン邸宅（竣工年 1900-33）の施主のうち、ユダヤ人の割合を数量的に把握する。これをもって本稿への補強とするとともにまとめとした。文献の精査の結果、67 件のうち優に半数以上がユダヤ人施主によるものと考えられる。人口比からも突出する割合と考えられる。

このような構成でユダヤ人のモダン運動への功績と、貢献に至らせた社会背景を探る。思想・文学や音楽界ではこのテーマでの言及が存在するが、デザイン界では邦文にまとめたものはない。本稿によってモダンデザイン波及への理解が進むことを期待したい。

II ウィーンのユダヤ人 世紀転換期以降

■反ユダヤ主義

世紀転換期のウィーン文化は、その革新性・独創性で 20 世紀の芸術・思想・科学のほとんどすべてに決定的な影響を与えたとされる。その関係者のほとんどはユダヤ人であった。彼らに有形無形に影響を及ぼした反ユダヤ主義を知る必要がある。

反ユダヤ感情と新思潮への市民の反感その合体をヘルト・マックは活写する。「装飾が無く簡素なロースハウス（1910）は現代建築を先取りするものだった。……略……だが当時のウィーン市民の目には、ロースハウスは怪物のように見えた。それは自由主義者とく鼻の曲がったユダヤ人>が、ゲルマン民族に注ごうとする危険な現代性を象徴するものだった。<歴史的に健全なもの>はすべてこの<頹廢した>芸術から守らねばならない。設計したアドルフ・ロースが実際に



ロースハウス 撮影：著者

ユダヤ人であるかどうかは重要なことではなかった。<ユダヤ人的>と<現代>は多くのドイツ人とカトリック教徒の市民にとって同意語だった。実際それはまったく的外れなことではなかった。マーラー、ヴィトゲンシュタイン、フロイト、シュニッツラー、……略……そして他のあらゆるユダヤ人の才能無くしてはウィーンをこれほど重要な文化的中心には決してならなかったはずだ⁹」とある。

反ユダヤ主義・ユダヤ性という概念や語句は、歴史家や社会学者が総括的な文脈で使用される語句ではなく、同時代の生きた言葉だった。新傾向文学に対し、保守派と進歩派の両陣営は猛烈な反発をみせたが、進歩派の新聞は、新人の文学者たちは反ユダヤ主義傾向を持っていると批判し、保守派の新聞では彼らの中にはユダヤ人が多すぎると書くなど日常的に使用された¹⁰。

この時期の反ユダヤ主義を主導したウィーンには 2 名の牽引者がいる。帝国議会議員ゲオルグ・フォン・シェーネラー（1842-1921）と、1895 年から 1910 年までウィーン市長を務めたカール・ルエガー（1844-1910）である。シェーネラーは激しい人種論的反ユダヤ主義者で、ほとんどの職業、教育機関からユダヤ人の閉め出しを要求する。自身の支持者には独自のシンボル・儀式的の制定、総統という地位（後にヒトラーが使用）の創設と支配、純粋な民族血統の証明を要求など、後のナチス支配体制を先導した¹¹。ユダヤ系新聞社の襲撃がもとで失脚後、その体制をただちに引き継いだのがキリスト教社会党のルエガーである。反ユダヤ主義は支持を集めシェーネラーに大成功をもたらしていたのである¹²。小市民層を基盤に、社会主義に基づく弱者向け施策で人気を博したルエガーは、在任中に死去し、盛大な市葬にはヒトラーも市民に混じり参列している。シェーネラーやルエガーの反ユダヤ主義が大衆動員に成功したのは、上流ユダヤ層に対する反感に加え、流入ユダヤ人と労働者・下層自営業者階層との対立競争が激化したことが要因となる。

以前も以降もウィーンには反ユダヤ主義が民衆に深く根ざし、存在し続けた。ナチスによるオーストリア合邦（1938）直後には市民によるボグロムは数週間も続く。デパート・商店が略奪され、個人邸も破壊・奪取された。ドイツと違うのは、これが自然発生した点にある。ナチス親衛隊機関誌の特派員が「オーストリアではボグロムを組織する必要がない。人々が自ら進んでおこなうからだ」と記している。そこには、皮肉なことにユダヤ人にとってプラス面もあったという。つまり状況が直ちに理解でき、即、逃げねば、に至っ

た故である。ナチス侵攻の39年5月にはオーストリアのユダヤ人は半数以上が脱出できている¹³。

この根深い反ユダヤ主義の構成要素を整理すると、まず歴史的な人種差別的憎悪、これには流入する貧困層への嫌悪感も含まれる（ウィーンではユダヤ人は60年の6500人から1910年の175,000人へ増加し人口の8.6%に至る¹⁴。流入の大部分は貧困層である）。全世界的な73年の株価暴落に続く大不況で職を奪い合い、また80年代以降のボグロムによるロシアなどからの難民急増、また第一次大戦勃発による難民急増で、反ユダヤ主義の風潮は高まる。難民の定住化を避けるため当局は就職・営業を阻止し、帝国の臣民ゆえにわずかな補助金を支給する。それがウィーン市民には遊んで税金を食いつぶす、住宅難をさらに深刻化させると映った¹⁵。25年以降の好況に転じた後も、競争相手には変わらない。反ユダヤ主義は難民攻撃からやがて全面展開し、人種主義的に無差別のユダヤ人攻撃へと急進化を見せることになる。

反ユダヤ主義の構成要素として、次にユダヤ人の富とその富に由来する絶大な社会的影響力が挙げられる。「富裕層ユダヤ人と国家の関係は完璧な調和がとれている」と歴史家カール・ショースキーは総括する¹⁶。その経済力が国家と結託したのである。商店主や勤労者など小市民層、また労働者階級や職人・農民層および下層階級は、ユダヤ人を「階級の敵」・「ドイツ人支配勢力の同盟者」として敵視する。反工業主義・反資本主義・反自由主義者としての彼らの防御的反応だった¹⁷。一方で産業界の旧勢力は、ユダヤ人が担う高度に円熟した資本主義に恐れを抱いた。彼らは変革の代理人として自由貿易・商業広告・割賦販売・既製品製造を手がけ発展させ、生産者と消費者の間に入り込み、古物商から百貨店に至るまで専門店の独占を打破した。そして都市化・商業化という雛勢を先取りする¹⁸。

理解不能な新文化への反発も反ユダヤ主義を構成する。その担い手の多くはユダヤ人であるという事実が嫌悪感を増大させた（シェーンベルクは新和音が聴衆を苦しめコンサート会場を追い出され、椅子まで叩き付けられる¹⁹。フロイトの学説やクリムトまたロース作品への拒絶反応は知られている）。これらに関わる知識人の多くがリベラル派の上流市民階層出身で、その階層ではユダヤ系市民の割合が非常に高かった。人口比で見れば少数であるのに極めて目立つ存在となる。

時代のエートスとしての不安感も構成要素に加わる。ユダヤ人が体現していると思われた〈現代〉への不安、自由主義的、国際的、非同調的で教会にも国家にも属

さない、という下層市民が忌み嫌うものすべての擬人化がユダヤ人だった²⁰。一方で1910年頃、ニューヨークを除きウィーンほどユダヤ人が大勢力である都市はなかった。ユダヤ人解放の理論的支柱である自由主義の中心地ウィーン、多様な成功チャンスへの期待に、多くのユダヤ人が引きつけられた。ゆえに反ユダヤ主義の絶好の温床となる。スケープゴートとしての条件が揃っていたのである。これらを総括し、反ユダヤ主義とはハプスブルク帝国崩壊後のオーストリアの公認イデオロギーでありウィーンの精神的風景であった²¹、と野村真理は『ウィーンのユダヤ人』で述べる。

ユダヤ人への反発・不安、近代性・合理主義が与えると懸念された悪影響を喧伝したのが、人種主義的・キリスト教的・民族的イデオロギーが合体した反ユダヤ主義である。じっさい、反ユダヤ主義を牽引したのはキリスト教社会党また民族主義諸派だった。これに対しユダヤ人側には結束した抵抗勢力が不在だった。なぜなら同化こそ選択すべき道という反民族主義と、民族の結束こそ対抗力、と主張する民族主義では妥協の余地は無かったのである²²。富裕層や知識層が中心の同化層は、そもそも自身をドイツ人と見なす例も多く、難民に対し反ユダヤ主義的言動すらあった。ユダヤ人社会の分裂は反ユダヤ主義者の利益となった。

■ユダヤ人の葛藤

これらの反ユダヤ主義を上流知識層はどのように捉えたのか。4人の文化人の例で見る。いずれも19世紀後半の、ユダヤ人解放というヒューマニズムの時代の富裕層出身である。その1人フロイト（1856-1939）は、自身の新学説への敵意が反ユダヤ人主義にも根ざしたであろうことは本人も感知していた。『精神分析への抵抗』（1925）という小文で、受けた反感を記した後、「精神分析という新説の提唱者がユダヤ人であったことは偶然ではない。孤立する運命を進んで引き受ける覚悟が必要で、これは他の誰よりもユダヤ人になじみの運命だからである」と言い切る²³。フロイトはユダヤ人であることを公言した人物であるが、それでも彼の *Moses and Monotheism* (1938) は反ユダヤ主義的作品とされるなど、葛藤も覗かせる。

同じく同化ユダヤ人の巨匠作家たち3名、シュニッツラー（1862-1931）、ベアホフマン（1866-1945）、ホフマンスタール（1874-1929）の例はさらに複雑である。アビゲイル・ギルマンの *Viennese Jewish Modernism* に依拠して概観する。いずれも高等教育を受け、ユダヤ人が主流で活躍できる医師や弁護士修

業をするも、知的・美的革新を求め芸術界へ転身する。(政治的上層部とその支配階級入りすることは、彼らにとってそれほど容易ではなく、一匹狼で活躍できる知的階層を狙うよりなかった面もある²⁴。人口は1割に満たないのに、彼らと同世代の93年頃にはウィーン大学の医学部関係者は48%に達し、681人の弁護士のうち394人、ジャーナリストの42%がユダヤ人だった²⁵。)彼ら3人は祖先から受継いだユダヤ性と戦い、しかもユダヤ人と感知されないよう配慮し時には反ユダヤ主義的言動もあった。シュニツラーの*Der Weg ins Freie* (1908)は、まさに反ユダヤ主義小説とみられ、よってナチスはこれをユダヤ人作品であるにも関わらず焚書の対象外とした。彼は読書会に招かれた際にも断わる。ユダヤ人作家視を拒否している

ホフマンスタールも自身をユダヤ人作家として見なしていなかった。曾祖父の代からの貴族の称号を継ぐ上流の出身で、一流の芸術家と親交を結ぶ富裕層に生まれ、芸術の殿堂と称された家庭環境で育つ。第一次大戦中には政府内にポストを持ち、声明文の執筆やスピーチライターとして活躍した。まさに体制側の、そしてドイツ文化に同化したユダヤ人であった。そのためかユダヤ人意識は希薄で世紀転換期頃には自身をユダヤ人とは明かしていない。それでもユダヤ人であることははっきりと視認されたという。1920年に、同じくユダヤ人劇作家で当時「演劇界の帝王」と呼ばれたマックス・ラインハルト(1873-1943)とザルツブルク演劇祭を創設したおり、地元のキリスト教系新聞やドイツ系新聞に、「ウィーンから侵入したユダヤ人もぐり業者」と書かれ、さらに1928年には「ユダヤの信仰を失ったモダン文化人の悲劇」と評される²⁶。

彼らは文化的・芸術的には高い到達度を示しながらも一方で反ユダヤ主義に翻弄され、その言説は複雑である。いずれの面々もシオニズムは拒否する家庭の出身だった。ひたすら同化を目指したのである。

■改宗はしても

ウィーン社会への同化にはキリスト教への改宗が必要と感じられた。彼らの父親世代がその第1世代となる。入場券として、また偏見から守り体裁を整えるために洗礼を受けたのである。しかし根本的な状況改善にはならなかった²⁷。さらに同化・ドイツ化は反ユダヤ主義の風潮を高めることにもなった。檜山哲彦は『学際都市ウィーン』で「時期を同じくして盛り上がった諸民族の権利拡大運動、ナショナリズムの方から見るなら、商才にたけて成り上がっていくユダヤ人は正

面の敵ハプスブルク帝国と一心同体でしかなかった²⁸」と述べる。その状況をギルマンは「同化の恵みと呪い」という表現で描写する。受洗しても結局は「改宗ユダヤ人」で引き続きユダヤ人と見なされた²⁹。エリート層にとって同化を希求するも叶わない絶望感、その矛先は東欧からの流入ユダヤ人に向けられた。流入民が反ユダヤ感情を高め同化を妨げる、と作家たちは苦悩を語る。帝国の都に押し寄せる下層民に言い知れぬ恐怖を抱いたのである。一方で改宗は一般社会から敵視を招き、上流人士を含め同胞から裏切り者とされ、孤立するユダヤ人が少なくなかったのである³⁰。

その孤立感は2代目以降に凝縮される。1代目は実業の世界で成功を納め、地位を得た自信が孤立感を凌駕した。オーストリア・ハンガリー帝国では1880年代に大好況が訪れていた。繊維産業に金属加工業が加わり、ウィーンは帝国全体の金融の中心地、主要企業の本社所在地、商業の中心地としてその経済的地位を強めていった³¹。その多くにユダヤ人が進出する。紡績・鉄道・電気・機械・食品加工など多岐にわたる。帝国は政治・経済面では圧倒的にドイツ人が優勢であるものの、多民族国家であったことも彼らの活路につながる。(ドイツ人およびハンガリー人・ルーマニア人・イタリア人など11民族が平和に共存し、各民族衣装姿も奇異視の対象ではなかった。軍隊に提出する兵士の忠誠書も書式には8カ国語の対応があった。)迫害の歴史で培われたユダヤ人の情報収集力と即決力、国際取引への習熟、イノベーション資質が奏功した。その1代目つまり親世代は、改宗はしても祖父母からユダヤ教の遺産を受継ぎ、その家庭環境で育った。そして富裕層入りを果たし新興成金として貴族文化を模倣し、装飾品に囲まれたブルジョワ家庭を作り上げる。この系譜にはヴィトゲンシュタインも連なる。19世紀後半には、ヴィトゲンシュタイン家は帝国でもっとも勢力を持つ家柄の1つになっていた。分離派会館の資金提供は同化2代目の子息による。

■改宗2代目 彼らの連帯

父親世代が作り上げたブルジョワ家庭に育ち、最高の教育を受ける。学問と芸術への支出が父親世代の地位と力の象徴だった。息子世代は親世代とは異なり、ユダヤ伝統へのアクセスに欠け束縛されない。敵対的環境の中で、彼ら若き教養人たちは父親世代の旧態的審美眼・芸術観とも戦い、新たなアイデンティティの創設を願う³²。彼らのキャリアは「同化の恵みと呪い」という語に凝縮されその例証となる。

その孤立感・絶対的被差別感が、過去にとらわれな
い革新文化の創造の源になったと檜山は分析する。孤
立感を和らげたのが知的連帯ともいうべき私的交遊関
係のサークルだった。別々のサークル同士が豊富な関
係を結び、知的に刺激しあい友情に連帯する。その場
のひとつがカフェだった。ここではヨーロッパ中の新
聞が読めた。ユダヤ人作家で同じく紡績業の富豪2代
目シュテファン・ツヴァイク（1881-1942）は語る
「あらゆる新しいものに対する最良の教養の場所は常
にカフェであった」、「世界で重要な文学と文化の雑誌
もすべて揃っていた」。そして国境を越え文化の革新
の動きを注視する。「われわれは新しいものを見つけ
た。自分たちだけに属して、父親の世代には属さな
かった新しいものを渴望していたからだ」と書き記し
るす³³。ここにロースなどが集った。

前述のヴェルンドルファーが1907年ウィーン工房
に託したキャバレー「コウモリ」も多重に意義を持つ。
設計はホフマン（非ユダヤ人、ナチスに気に入られウィ
ーンの芸術・工芸コミッショナーに任命される。公共建
築も手がけ、かぎ十字の紋章入り銀器などをデザイン）
が中心に担当し、モーザー、クリムト、ココシュカな
どが参画した。室内装飾はもちろん、舞台美術、衣装、
緞帳、食器、給仕の制服、ポスター、プログラムにい
たるまですべて贅を尽くしウィーン工房でデザインさ
れ、演し物にもまたユダヤ人芸術家が関与した³⁴。

加えて、私的サロンでは、人脈・顧客紹介などより
密接な関係を築く。それらの主宰にもユダヤ人富裕層
が目立つ。フロイトやシェーンベルクの定期サロンに
加え、ヴィトゲンシュタインもサロンを開設し、クリ
ムトには娘たちの肖像画を描かせている。分離派設立
のための会合も、後にホフマンの施主となるカール・
モルの私邸や、同じくホフマンの施主の義姉のジャー
ナリストのベルタ・ツッカーカンドル邸で開催されて
いる。彼らの支援は広く前衛芸術家に向けられ、ホフ
マンの代表作ストックレー邸やサナトリウムもサロン
から発している。彼の最初の施主もヴィトゲンシュタ
イン家である。ロースへの財政支援でも知られる。

彼らの連帯には置かれた敵対的環境、また改宗者と
しての孤立感も影響したと考えられる。「同化ユダヤ
人はもはやユダヤ人ではない、ドイツ人でもない、不
適合な存在」との自己認識が連帯感に重なる³⁵。1907
年にはマーラーが公爵と不仲になり、宮廷オペラ劇場
の芸術監督の座を辞す事件があった。再任の署名活動
は、クリムト、シュニッツラー、ホフマンスタール、
ツヴァイクなど同胞の面々が中心になった。ヴァイマ

ル共和国時代（1919-33）のベルリンと同様、ユダヤ
人同士の知的連帯の中に、しかし一歩先んじて、ウィ
ーンに革新文化が生み出されてゆく。

III ユダヤ人群像 施主・パトロンとして

III-1 フリッツ・ヴェルンドルファー

■フリッツ・ヴェルンドルファー（1868-1939）とは

前述のキャバレー「コウモリ」の開業について、
「カネと趣味の両方を兼ね備えた、周知のようにこの
両者が一緒になるのはごくまれなのだが、才気あふれ
る紳士フリッツ・ヴェルンドルファーがウィーン工房
に作らせた³⁶」とある。彼はオーストリアで最大級の
紡績企業体のオーナーとして銀行家として、またウィ
ーン工房の資金源・経営ディレクターとして自身の倒産
（1913）まで豊富な資金を提供し続けた人物である。
倒産後に渡米、テキスタイルデザイナーとして活躍、
絵も描き27年にはウィーンで展覧会を開催する。ペ
ンシルヴェニア州にて死去。彼のコレクションは散逸
するも、現存すればウィーン工房第一級のショーケー
スと評される³⁷。クリムトの最も一貫したパトロンで
あり、ホフマン、モーザーを支援し、子息の絵画教師
に若き画学生ココシュカを招く。その人物像と心情を
エレイナ・シャピラの論文³⁸より概観する。

富裕層に生まれ、1880年代に家業の繊維産業研究
のため英国へ留学する。その間美術館で多くの時間を
過ごし、マッキントッシュとの知己も得る。後に彼の
ウィーン招聘などこの縁は発展する。95年に家業に
参画、オーストリアで運転免許を持つ最初の女性の
1人、ユダヤ人富裕層令嬢と結婚する。97年には事業
を拡大させ、いよいよ念願の芸術パトロンとして始動
する。98年には分離派会館がヴィトゲンシュタインの
資金援助で建設された。このことが30歳になったヴェ
ルンドルファーの転機となる。実際にこの会館を自身
の社交の場として親しむ。アヴァンギャルド芸術に傾
倒し、同胞でフリーメイソン仲間の作家・芸術評論家
ヘルマン・パール（1863-1934）を通じ、精力的な学
びを開始する。彼にモダン推進への熱意を語り、自身
を諸外国の文化発展を比較し論じる誇り高いコスモポ
リタン・オブザーバーとして打って出ている。その反
面どこか自己否定的なニュアンスも漂わせる。1902
年にオーダーしたレターヘッドデザインも自虐的で、
典型的なユダヤ人的外観のグロテスクな図象化であ
った。その同じ年にプロテスタントに改宗している。

その内面には反ユダヤ主義への過剰反応とも言える
防衛姿勢も窺える。キリスト教徒への悪影響と喧伝さ

れたユダヤ人の偏見的要素について書簡に言及し、またいわゆる「ユダヤ資本主義」という偏見を自身のものとして内在化させるなど、複雑な心理を露見させる。レターヘッドも、反ユダヤ主義が囁くユダヤ人の醜さを誇張することで、偏見に闘いを挑み自己解放を目指したのである。前述の作家たちに共通する自己否定的逡巡がここでも見られる。彼が歴史様式を否定し、芸術の世界で父祖と距離を置き、自邸を舞台に芸術実験を支援したこと、それらは日常となった反ユダヤ主義との衝突、また将来不安に端を発しているのである。

■自邸の改装 その思惑と伸展

自邸の改装を1902年に、過去との決別というステートメントとして、ホフマン、モーザー、マッキントッシュ、マーガレット・マクドナルド（マッキントッシュの妻）に委託する。「芸術愛好家の家」をテーマにモダンデザインを求めた。同化ユダヤ人としての新アイデンティティ構築とモダンデザイン運動の支援が目的だった。実際に竣工後は芸術家巡礼の場となる。改装には象徴的な意味を持たせた。過去を打破し、ユダヤ人を排除した時代の歴史様式や、アンティークに対するブルジョワ両親世代の崇拜の打破、前衛文化を自身のものとする、という決意だった。この改装直後に、当時、応用芸術大学の教授であったホフマンとモーザーに、彼らの夢（ウィーン工房設立）実現の資金提供を決心する。総合芸術作品としてスタジオ（客間）やダイニングはホフマンに委託、音楽室（客間）はマッキントッシュ夫妻に、またギャラリーの壁面収納や家具などはモーザーに委託された。総合芸術作品としての自邸とは、英国のモダン運動の端緒となったウィリアム・モリスのレッドハウス（1860）に倣ったものだった。

マッキントッシュ夫妻という英国勢を招いたのは、模範となるドイツの先例2例に倣った。ダルムシュタットのルートヴィヒ公である。ドイツ応用芸術の進展という彼の願いは99年の芸術家コロニーの創設に至る。その彼が97年に新居の内装にスコットランド人ベイリー・スコット、施工にはアシュビーのギルドを招いた。いずれもモダン揺籃期の重要登場人物である。そしてもう1例は芸術誌の編集長が98年に自邸改装にマッキントッシュを招いている。ヴェルンドルファー自身もすでに見たように、マッキントッシュとは交際があった。（ウィーン分離派展への招聘が実現した顛末はこうである。ホフマンもメディアを通しマッキントッシュを知り、ヴェルンドルファーも英国デザイン誌 *The Studio* を通してトレンドを熟知していた。そ

こからヴェルンドルファーの関わりで招聘が進展する。彼の自邸では会話は完璧な英語で英国流で生活していた。）分離派展期間中はマッキントッシュをウィーンの自邸に滞在させている。

もっと直接的な動機もある。実は「芸術愛好家の家」というテーマの出自は、1900年12月の建築雑誌社主催のアイデアコンペである。分離派会館の設計者オルブリッヒも審査し、1位は該当者がなく2位はベイリー・スコットが受賞した。マッキントッシュ作品は規定違反ながら特別賞を受賞する。その作品のモダン理念の統制ぶりが、ヴェルンドルファーの芸術パトロンとしてのアイデンティティ魂に強く響いたのである。コレクションとインテリアの完全な融合作品としての自邸実現に、マッキントッシュを必要と感じたのである。もう1人の指名者ホフマンとは、分離派1900年展の支援を契機に親密な関係が生じていた。改装にはこうした重層的人間関係がベースとなった。

1902年6月に当局に改装申請され、芸術作品を中心にテーマ性のあるインテリア空間が創出される。まだ未完成の02年に、クリムトの祝宴用にウィーン工房にカトラリーを依頼する。小物にまで伝統的ブルジョワ流儀に対抗・分離という願いが込められた。マッキントッシュの影響が明白なホフマンのカトラリーは商品化されるも、06年まで購入者はいなかった。そのようなセッティングは夫妻を先進の人としてディスプレイした。コスモポリタンであることの表明として窓台とテーブルには盆栽を飾らせた。

倒産までの10年間、国内外のアヴァンギャルドを招きパーティーを開催する。ヴェルンドルファーは内在化した偏見を止揚し、自邸をモダンデザインの実験の場とすることで、カリスマ・コレクターでパトロンという新アイデンティティを具現化したのである。残された写真は文化史の華麗な証人となる。「芸術愛好家の家」はセレブ芸術家ワールドへの資格証となった。そしてアートと空間の革新的フュージョンは現実からの逃避を提供した。反ユダヤ主義という憤懣の日々や呪縛から解放され将来への光明を求めた日々であった。

III-2 ヴィクトル・ツッカーカンドルと義姉

■ヴィクトル・ツッカーカンドル（1851-1927）とは

ブルカースドルフ・サナトリウム（1903-04）をホフマンに託した施主である。鉄鋼業で財を成し、クリムトの忠実なパトロンとして作品を莫大に購入したことも知られる芸術愛好家である。サナトリウムはホフマンまた結成直後のウィーン工房には初のビッグ受



プルカースドルフ・サナトリウム 撮影：著者

注だった。幾何学構成でインターナショナル・スタイルを先導するモダン建築である。

施主ヴィクトルは紡績業で財を成した父の代でハブスブルク帝国ハンガリーから19世紀末に移住する。ユダヤ人富裕層にはならぬウィーン移住だった。いずれも才能並外れた5人兄弟の4番目で、長男は筆頭的解剖学者、次男は現代泌尿器医学の父と称される1人、3男は経済学者、本人は鉄鋼業の大資本家となる。その富のかかなりの部分を芸術に費やす。ユダヤ人富裕層が示す傾向で、芸術と学問への支出は地位と権力の象徴だった³⁹。クリムトは作品の過激性で公的仕事から干されることになるが、パトロンらが彼を救った。その多くはユダヤ人富裕層で彼らは親密な関係を築きビジネスパートナーでもあった。共にハンガリーやボヘミア出身であったことも奏功した。

とはいえ自身の倒産に至るまで芸術支援したヴェルンドルファー夫妻とは異なり、冷徹な革新的企業家精神も見せる。母体企業とは無縁の医療界しかも精神疾患という新分野への進出、そこにバイオニアとして鉄鋼界を先導し成功を遂げた自負心やアイデンティティ意識が窺える。療養施設として清潔性維持のため、機能的モダン建築を求めた。高コストが予測されながらもモダン芸術家群に託すなど、自負心がモダン建築を推進した。結果は契約金額を遥かに超える大幅超過となり訴訟に至る⁴⁰。RC造という最新技術・工法、小物までウィーン工房による装備が高コストにつながった。しかし、病院とはいえ上流層向け高級リゾート施設に、装飾を排した前衛建築で勝負したのである。富裕層には歴史様式リバイバルが好まれ、装飾を排除したロースハウス（1910）がスキャンダルとなる以前のことである。先進的企業家というアイデンティティに支えられた自負の人ならでの決断だった。

■ベルタ・ツッカーカンドル（1864-1945）とは

ヴィクトルの芸術界での指南役は兄（解剖学者）の妻で、やはりユダヤ人ジャーナリスト・芸術評論家・自由主義者のベルタ（1864-1945）である。ヴィクトルにホフマンとウィーン工房を推薦し、ストックレー邸誕生にも深く関わった。その人物像をシャピラの評伝⁴¹から紹介する。彼女は父（新聞界の大物で、リベラル派の皇太子ルドルフの指南役）のもと、家庭教師として招いた芸術家に薫陶を受け成長する。父が築いたフランス政界とのコネクション（首相も努めたクレマンソーの弟はベルタの姉と結婚）そのリベラル精神をミッションとして、50年にわたり著作活動を続けた。第1次大戦中は好戦的風潮の中、不戦論を表明した勇気の人であり、東欧からの難民流入（ほとんどユダヤ人）現象に対しては寛容姿勢を市民に説く気骨の人だった（同化したユダヤ人エリート層とは逆の立場）。戦後の疲弊したオーストリアにフーヴェー大統領からの支援を実現させ、社会主義また保守主義の両政党から民間オーストリア大使と称された女性だった。戦間期にはいくつかの新聞の発行を手がけ、英国やフランスの首相や財務大臣とのインタビュー記事を連載する。ナチス・ドイツのオーストリア合邦（1938）に際しては、クレマンソーの尽力でパリに逃亡する。

そのかたわら旺盛なサロン活動を展開する。前衛芸術家が集うサロンはまさに芸術院の様相を示す。ウィーン分離派誕生の舞台、またアインシュタインやマーラーが妻となる女性と出会うなどエピソードに事欠かない。物議をかもしたウィーン大学の天井画も、彼女の夫



サナトリウムのインテリア 撮影：著者

(高名な解剖学教授)の縁でクリムトの受注に至り(1894)、人体解剖図描写の機会も提供する。モダン芸術推進の旗振り役となり、ココシュカ、建築家ヴァーグナー、ホフマンを支援し、分離派やウィーン工房の名声を高める。既にみた作家ホフマンスタールと演劇人ラインハルトのザルツブルク演劇祭(1920年代)も彼女のプロモートだった。芸術家の支援に対しフランス政府よりレジオンドヌール勲章が授けられる。

旺盛な左派の政治姿勢そして革新的芸術運動支援と、論集45・46号のアヴァンギャルド建築を推進した女性群と、びたりと重なる人物がここにも存在する。

■プルカースドルフ・サナトリウムとは

1904年、ヴィクトルはウィーンの西郊プルカースドルフに新型サナトリウム建設を決心する。鉱泉が湧く14haの土地はスパ用に前年に購入していた。施主の選択で最新技術の鉄筋コンクリート造とし、温泉浴と理学療法を主体に肺結核および精神疾患のための保養所が計画された。富裕層に最高のコンフォート提供を主眼に、音楽室・読書室・卓球室・ビリヤード室・ゲーム室を備えた。静寂・光と風・装飾を減じた空間が、特に上流層の精神疲労やヒステリーに効果があるとされた⁴²。いずれも新たに唱えられた病名や概念である。

ホフマンとウィーン工房が担った建築と内装は極めてラディカルで、まさにモダン建築への敷石となる。続く代表作ストックレー邸(1905-11ブリュッセル)の前哨作でもあった。水平感のボックス構成、スタッコ装飾を排除し極めてシンプルな外観、白く滑らかな表面仕上げ、リボン窓ではないものの水平に連続する窓などからインターナショナル・スタイルの前哨作として、注目を集めるべき作品である(当初案では全周を回るリボン窓が2階に計画されていた)。唯一の建築的装飾は、窓周り等のブルーとホワイトのチェッカーパターンのモザイクタイル・ボーダーである。このホフマン特有のパターンがインテリアにリピートされ、シンプルながら装飾性を呈し、総合芸術作品として完成する(モザイクは展示用にグリッドパターンのプレッツェルまで考案し、これは見学者をいたづらに刺激し、大いに揶揄・批判される)。家具の革素材は特別にパリから取り寄せた。デザインがシンプルであればそれだけ素材が重要という論だった。花と果物の装飾アレンジまでデザインし、毎日ウィーンの高級花屋から配達させる徹底ぶりだった。(家具はV&Aミュージアムで、ガラス器はNYの近代美術館で展示。)

特筆すべきはサナトリウムが上流階級の社交場として機能した点である。マラー、ホフマンスタール、シェーンベルク、シュニッツラーらが集った。本稿に繰り返し登場する面々である。インドのマハラジャ、またアメリカ人資産家も常連となる⁴³。

ナチスのオーストリア合邦に伴いサナトリウムは奪取される。ヴィクトルはすでに27年に死去、相続していた妹はゲシュタポに莫大な金額を支払うも、娘とともに強制移送され殺害される。戦中は軍事病院として戦後は占領軍に徴発されるなど、サナトリウムは変遷をたどる。ビロード革命を経て95年に修復工事が始まり、現在は高齢者施設として活用されている。

IV おわりに

本稿への補強材料として、中欧のモダン建築の施主像を量的に探る必要がある。そこで1900年以降のハプスブルク帝国時代から1933年(ナチス政権奪取)までの、帝国各地域のうち現チェコからオーストリアにかけての帝国領の上オーストリア・ボヘミア・モラヴィア・シレジアに現存するモダン大邸宅を探った。施主・設計者・周辺状況が明らかな文献⁴⁴を中心に、67件を地域状況・施主像・建築概要・インテリア概要・政変が及ぼした変遷および施主家族のその後(アウシュヴィッツにて死亡など)を精査したのである。様式はフリースタイル、セッセッションニズム、キュビズム、機能主義など年代ごとに差異はあるが、いずれも当時のアヴァンギャルド建築であることに変わりはない。

本稿の文脈からユダヤ人の施主件数に絞り紹介すると、67件中35件が明確に該当し、状況から11件に濃い可能性が検出できる。判別不明は6件、明らかに非ユダヤ人と断定できるものは15件程度という結果となった。優に2/1以上が該当すると見てよい。人口比など勘案すると結果として史実にも記録されているようにユダヤ人とモダンデザインとの親和性が顕著である。加えて論集45号と46号でみたように、モ



トゥーゲンハット邸 撮影：2点とも著者

ダン排斥傾向また嫌悪の風潮の中、モダン建築の施主となるには強烈なアイデンティティ志向が存在する必要がある。時代の状況が作用し、富裕層ユダヤ人施主にはそれが存在したことになる。つまり彼らの、本稿で見た精神性がモダンデザインの推進に大きく寄与したと考えられるのである。

精査した期間の最終を飾るひとつが、ミースの代表作トゥーゲンハット邸（1928-30）である。チェコ第2の都市ブルノ（帝国領モラヴィアの中心都市）に存在する。ここで施主家族が暮らせたのは8年間のみで、その間は文化サロンとして、またナチス・ドイツからの亡命文化人の支援センターの役割も果たした。妻が先導し夫妻でモダニズム運動各分野の命脈を支えたのである。しかし家族もスイスそして南米ベネズエラへ余儀なく亡命する結末となる。ナチス侵攻後はゲシュタポに奪取される。命運はかくあれども、施主は建築家に代表作を創造させ、モダン運動を支え、後世にユネスコ世界遺産を遺し、社会に貢献することになるのである。現在はリビング右手のテラス窓が電動で地下に引き込まれる装置まで再現され、建築家やその卵に視察の場を提供している。

世紀転換期からナチスの政権掌握・侵攻（1933-39）までこの間には、前述の分離派会館を支援したカール・ヴィトゲンシュタインや、ペーター・ベーレンスを支援したドイツ最大の電機会社 AEG 創設者エミール・ラテナウを筆頭に、このように歴史に残るモダン建築に寄与したユダヤ人が続出することになる。

引用文献

- 1 ベヴスナー, ニコラス, 白石博三訳『モダンデザインの展開 モリスからグロピウスまで』みすず書房 1957, p. 111
- 2 ibid p. 115
- 3 木村直司編『ウィーン世紀末の文化』東洋出版 1993 より伊藤哲夫『世紀末ウィーンの近代建築の成立をめぐる』p. 109
- 4 ibid p. 112
- 5 野村真理『ウィーンのユダヤ人』御茶の水書房 1999, P. 339
- 6 ibid p. 7
- 7 ibid p. 335
- 8 ibid p. 103
- 9 マック, ヘルト, 『ヨーロッパの 100 年』上 長山さき訳 徳間書店 2009, p. 78
- 10 3 と同書, 神品芳夫『世紀末文学の歴史的バトス』p. 8

- 11 9 と同書 p. 79
- 12 ibid p. 81
- 13 ibid p. 296
- 14 3 と同書, 鈴木降雄『世紀末ウィーンの日陰』p. 183
- 15 5 と同書 p. 151
- 16 9 と同書 p. 82
- 17 グルンベルガー, リヒアルト, 『第三帝国の社会史』池内光久訳 彩流社 2000 p. 157
- 18 ibid p. 558
- 19 9 と同書 p. 73
- 20 ibid p. 81
- 21 5 と同書 p. 539
- 22 ibid p. 352
- 23 3 と同書より野田倬『フロイトとウィーン』p. 76
- 24 ibid p. 75
- 25 14 と同書 p. 183
- 26 Gillman, Abigail *Viennese Jewish Modernism* Penn State University Press, 2009 sample chapter
- 27 大澤武男『ユダヤ人最後の楽園』講談社 2008 p. 25
- 28 餐庭孝男編『ウィーン多民族のフーガ』大修館書店 2010 より檜山哲彦『学祭都市ウィーン』p. 26
- 29 26 と同書 p. 20
- 30 ibid
- 31 3 と同書, 八幡康貞『思想の運命・都市の運命』p. 35
- 32 ibid p. 39
- 33 9 と同書 p. 73
- 34 3 と同書, 田辺秀樹『陽気なミュースの世紀末』p. 173
- 35 26 と同書 p. 20
- 36 34 と同書 p. 172
- 37 Knips, Sonia, *Fritz & Lili Waerndorfer: Art Patrons in New Vienna* The Blue Lantern 2013
- 38 Shapira, Elana, *Modernism and Jewish Identity in Vienna* Studies in the Decorative Arts, vol. 13, no. 2 The University of Chicago Press 2006, pp. 52-92
- 39 Simmons, Lucian, *Victor Zuckermandl and his Collection* Christie's Ushmm Speech 2011
- 40 Fahr-Becker, Gabriele, *Purkersdorf Sanatorium WIENER WERKSTATTE*, TASCHEN GmbH, 2008 pp. 21-36
- 41 Shapira, Elana, *Berta Zuckermandl 1864-1945* Jewish Women's Archive
- 42 *Purkersdorf Sanatorium* Alma 2013
- 43 Lebrecht, Norman, *Looted Klimt - the Mahler connections*, Slipped Disc 2011

44 Slapeta, Vladimir, Great Villas of Bohemia, Moravia and Silesia FOIBOS BOOKS 2010 pp. 44-437

参考文献

新見隆『ウィーン工房モダニズムの装飾的精神』美術出版社 2011

伊藤哲夫『ウィーンの都市空間と建築』大修館書店 2010

川向正人『アドルフ・ロース』住まいの図書館出版局 1987

天貝義教『オーストリアの近代工芸運動』思文閣出版 2008

伊藤定良『ドイツの長い19世紀ドイツ人・ユダヤ人・ポーランド人』青木書店 2002

山下肇『ドイツ・ユダヤ精神史』講談社 1995

スケット, アラン, 『ハプスブルク帝国衰亡史』鈴木淑美訳 原書房 1996

図録ウィーン工房1903-1932 美術出版社 2011

Mardaga, Pierre *OTTO WAGNER* Ernst Wasmuth 1987

Noever, Peter, Josef Hoffmann Designs MAK Prestel 1992

Vila Primavesi, *Olomouc, History of Vila Primavesi* Shapira, Elana, *Jewish women encyclopedia Adel Bloch Bauer*

Booklet *The Stiftung haus Schminke*

ERNST FUCHS MUSEUM OTTO WAGNER VILLA Leaflet *TOPOGRAPHIE DER BAUTEN DER MODERNE* TOPOMOMO. EU 2014

Gustav Klimt Biography

<http://www.klimtgallery.org/biography>

Arnold Schoenberg Bach Cantatas Website

Hugo von Hoffmannsthal from Wikipedia 2014.

Oskar Kokoschka from Wikipedia 2015.

Portrait of Adel Bloch-Bauer from Wikipedia 2014.

Behind the Evolution of Modern Design Research into the Circumstances of 1900' A Socio-cultural Review of Jewish Contribution to Modernism

Faculty of Liberal Arts, Department of Interior and Environmental Design
Masako TSUKAGUCHI

Abstract

This paper, 10th issue of the serial work, reports social and cultural circumstances surrounding the Jewish patrons of Vienna modern architecture which was entitled to the first fruit among the modern movements by critic N. Pevsner. Behind the Jewish contribution there had existed a strong eager for establishing a new status suitable for their intellect and social power against the Anti-Semitism, which had been intensifying on and on these years.

2 case studies on this report; one is Zuckermandl's Purkersdorf Sanatorium (1903) in Vienna and the other, Fritz and Lili Waerndorfer's villa (1902) also in Vienna, bring out how unstable mentality converted Jewish elite had those days as well their struggle to develop their identity as an innovative pioneer breaking down anything conventional. Just as Waerndorfer was renowned modern art collector, patron of Wiener Werkstatte and supporter of modern designers, so was Zuckermandl.

Total 67 surviving modern villas building from 1900's to 1933 (Nazi regime) around post Habsburgermonarchie area are examined as a material to support this study. Almost over half of them were by Jewish clients. Comparing the population rate this fact obviously shows how and what Jewish clients expressed on their choice of modern architecture.

Keywords: Waerndorfer's villa, Purkersdorf Sanatorium, Zuckermandl, Wiener Werkstatte,